
ネトラセ妻
～他の男に抱かれて欲しいんだ～
基本CG13枚+α
本編たっぷり100枚収録！


「朝だよー。靖くん。朝ー！　ちゃんと起きないと会社遅刻しちゃうよ？」
するとそこで、唇にやわらかい感触。真由美のキスだった。
「よし、っと。朝ごはんの準備してあるからね」
毎朝恒例の目覚めのキス。
結婚してから今まで、ほぼ毎朝している夫婦のスキンシップだ。
性格が良くて美人で、旦那一筋。
こんな完璧な妻、なかなかいるものではない。
これほどの女性を伴侶に出来たことは、何事にも代えがたい幸運であった。
でも……。
唯一。他の男を知らない……その点だけが、俺にとっては不満だった。



「やだ、そんなこと言わないでよ。
恥ずかしいんだから」

付き合い始めてから7年。
結婚してから2年。

……こうして今も頻繁にセックスするが、
彼女はいまだに恥じらいを捨てられずにいる。


「はぁっ、んくっ、あんっ……
ひぃっ、ふぁっ……動くよ……」
「あぁぁっはぁぁあっ……
あっ、はひっ、あんっ……
あっ、あぁぁっ……」
はぁ
はぁ
ブヒュッ
ブヒュッ
……真由美はセックスが
好きな方だと思う。
週に何度もするくらいなのだから
それは間違いない。
「あ……あぁ……っ……
んっ、くぅぅっ、ぅう、ぁっうぅ、
うんっ、あぁっ、うん……
気持ちいいっ……あ、あっ……」
……でも、俺しか知らない。
セックスが好きなのに、男は俺しか知らないのだ。


「ぁぁあっ、いやぁあっ
ああ……はぁ……
んんっ……はぁああっ」
……艶めかしい妻の喘ぎ声。
この声を聞いたことがあるのは
俺しかいない。
はぁ
はぁ
「ぁああッ……んんっ……
はぁぁっ、ぁああっ……ぁあ……
あっ、ぁああっ、あっ……」
もし、これが俺じゃなく、他の男だったら。
他の男の上で腰を振っていたとしても、
同じように喘ぐのだろうか。


「はぁっ、あんっ……
あっ、はぁっ、はぁっ、
変に……なりそうっ……
はっ、はっ、んっ、あ、あっ！」
はぁ
はぁ
「んっ……くあああっ……
んっ、あっ、あんっ、いやっ……
そ、そんな気持ちいいところ
ばっかりっ……あぁっ、
はっ、はんっ、んんっ！」
全てを曝け出した自分の姿を、
他の男に捧げるのだろうか。
「くっ……うあぁあっ……っ……
凄い、あ、あ、あ、あっ、
あぁっ、はぁあっ、あっ、
靖くん、すっごく硬いっ……」
「真由美っ……」


「っぁ……あっ、んっ、んんっ……
だめっ、ふぁ……っ、くふぅっ、
あっあっ……くっ！
あんっ……あっ、ああっ、あぁ……」
……俺のペ●スは、
ガッチガチに固くなっていた。
まるで10代の頃のような、
はちきれんばかりの硬さで。
はぁ
はぁ
「んぁっ、あはぁっ、ああぁっ、
あぁあっ、ああっ、あっ、ひぁぁっ！
はっ、はっ……あはぁっ、
あぁぁっ、あぁあっ！」
真由美が蕩けた顔で俺の事を見つめている。
「ああっ、あっ、はぁっ、
靖くん、わ、私っ、イ、イキそうっ……！」


「いいよ、イって」
俺は真由美の腰をつかむと、一緒に絶頂に達するべく下から突き上げた。
「んはぁっ、はっ、んっ、ふぁっ……あ、ああっ……ああっ、んっ……ぁっ……あぁっ！あぁぁぁぁんっ……ふぁっ……」
俺以外の男に突かれても、こんないやらしい顔をするのだろうか。
「あふぁあっ……もっとっ、はっ、はっ、あっ、はあっ、あぁあ、っあぁぁ……ぁあっ……！あ、や、はげしっ……」
真由美が他の男としていると脳内補完することで、俺のペ●スは中折れすることなく常にギンギンだった。


「ぁあああっ……ぁあっ……
あはあああっ、も、もうだめっ……
あっ……だめっ……あ、あ、やぁっ！」
「真由美っ……イクよっ……」
ビクンッ
ビクンッ
「いっしょ、いっしょにっ……
あ、あああっ……あぁっ、
イ、イクゥッ……
イクっ！　イクッ……」
はぁ～……♡
はぁ～……♡
「っっっ――っ！　――っ……！
っはあっ……！　はあっ……！」


行為の後、俺は何気なさを装いつつ、
真由美に浮気願望があるかどうか探りを入れた。
「真由美は俺としか付き合ったことないけど……
他の男とも付き合ってみたかったな、とか……
どういう感じなのか知りたかったかな、とか……そういうのあるのか？」
「んーーーー！　結構きわどいところ聞いてくるね！」
「……正直に言うと……まあ、あるよ？
靖くんは……付き合ったことあったんだよね」
「まあ……そんなに長く付き合ったわけじゃないけどな」
「セックスに関しても思う？　他の男とも経験してみたかった、とか」
「まーまーまー……まあ、あるよ？　それは……うん」
「でもね！　そういうの、誰でも少なからずあると思うよ!?
私だけじゃないと思うよ!?」
「わかってるって。大なり小なり誰でも持ってると思うよ、そういうの」

「じゃあ、次は靖くんの番。
ほら白状なさい。私はちゃんと話したんだから、靖くんも」

「わかったじゃあ……言うけどさ……変な勘違いはしないでくれよ」

真由美に話をさせた以上、俺がだんまりというわけにはいかない。

「俺は真由美の事本当に愛してるし、
これからもそれは変わらないつもりだ。
それを踏まえた上で聞いてくれるか？」

「うん、もちろん。何？」



「俺は、真由美が他の男とイチャイチャしているのが、好きみたいなんだ」

「……え？」


寝取られ性癖がある俺と、
他の男ともセックスをしてみたいという願望がある真由美。
俺は浮気願望を持ちつつも躊躇いを見せる真由美に、
彼女がセックスをしてみたいと望む相手に
双方合意の上で彼女を貸し出すという提案をした。
「……で、新開さんはなんて？」
「うん……OKって言ってたんだけど…あのね。
出張の日あるでしょ？　あの日だったらいいよって……」
「え……出張の日って、確か……」
俺と真由美が結婚式で夫婦の誓いを立てた日。結婚記念日だ。
「……いいよ。新開さんにはOKって伝えて」
「わかった」
これでもう、後戻りできない。


新開さんと入ったレストランで、私は少な目のワインを3杯飲んだ。
そして、めちゃくちゃ酔った。
「もしやめたくなったら、遠慮なく言ってくれていいよ。
当然の事だけど、無理やりするつもりはないから」
「……大丈夫です。心の準備は……できてますから」
そして、部屋に着くと……
「あっ……や……新開さん、どこ触ってるんですか」
「俺も、それなりに酔ってるからね」
むにっ


私が抵抗しないのをいいことに、
新開さんの手が私の体を這っていく。
「暑いね。こうしていると」
「あっ、し、下はっ……
ダメですっ……
手入れないでっ……」
「こんなに暑くなっているのに、
本当にダメなの？」
「あぁぁ……はあっ……
はあっ……はあっ……！」
……でも、それでよかった。
これは私の妄想の展開、そのものだった。
はぁ
はぁ
ヒクンッ
ヒクンッ


「結構派手めのつけているんだね」
「はぁ……っ……あぁっ……や、だめ、見ちゃ……ぁっ……あふぁあっ……！」
「綺麗だね、高坂君。好きだよ、高坂君のおっぱい」
プチ
ぶるん
ブラジャーの中にもぐりこんできた。
新開さんの手が、
「はぁっ！　あ、あ、あ、あっ……そんな、乳首つまみながら、変な事、いわないでくださいよっ……んっ、あっあっ……」


「はっ、はぁっ、ぁぁあっ、
はひぃっ……あんっ……
やっ、だめ、だめえっ……！」
「下着、濡れているね。
それもかなり広範囲に」
「食事していた時から
なんだろう？　本当は」
……見透かされていた。
はぁ
はぁ
「んっ……は、
はずかしいですっ……！
あ、あ、あ、あ、あ、
はっ、ふっ……あああぁあっ！」
「そろそろ、これも取っちゃおうか」

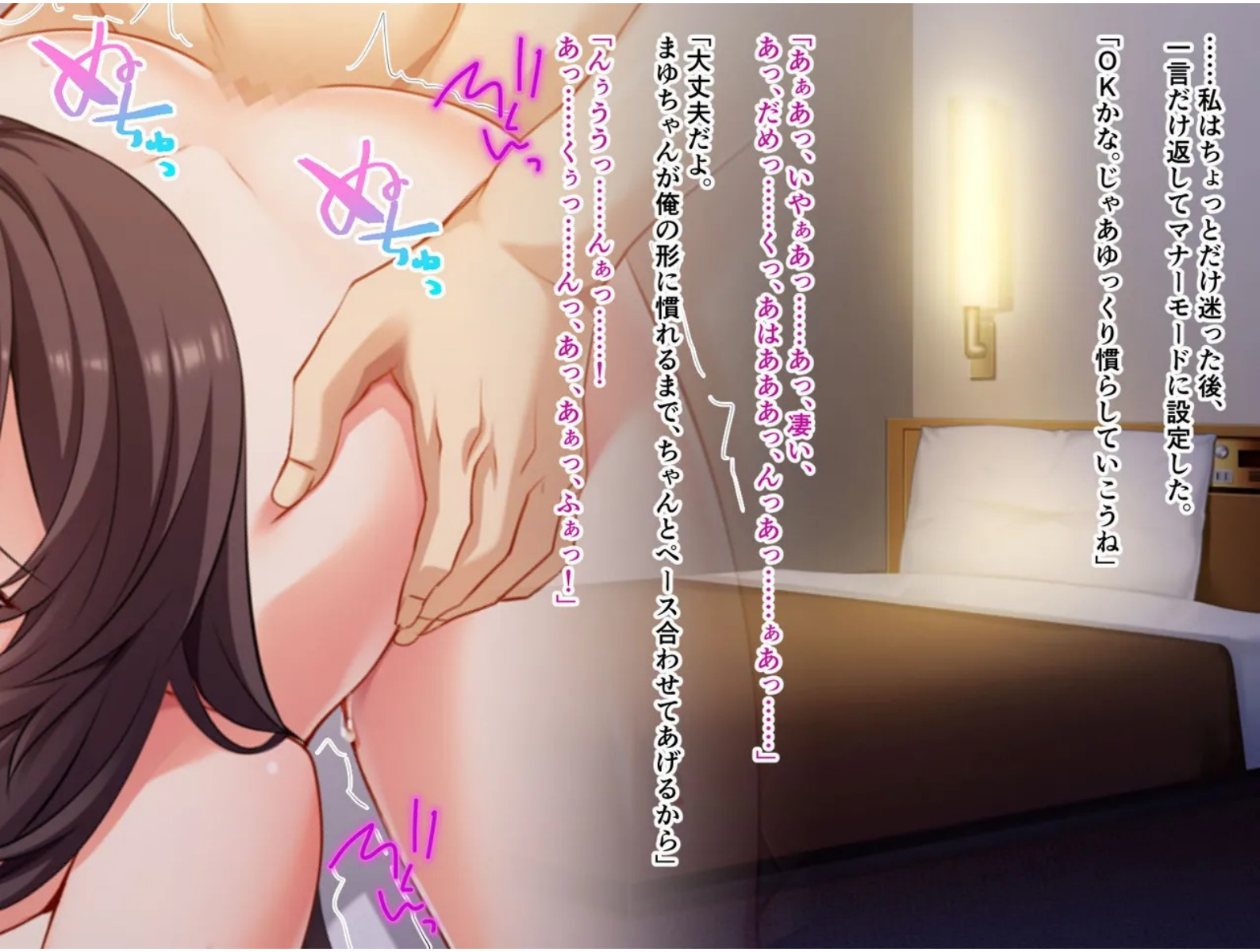

「乳首、すごいね。すごく勃ってる」
「どうしてそういう恥ずかしいことばっかりっ……！ あああっ……！」
はぁ（ハート）
はぁ（ハート）
「じゃあ、今から高坂君の乳首、両方とも摘むよ。いいね？」
「だめ、それは……っっ……！ はぁ、はぁ！ あぁっ、んっ、んんっ、あっんっ、あっ、あぁぁぁっ！」
「おっと。大丈夫？ じゃあ、今度はここの準備をしようか」


「ああっ、あぁうっ、あぁあっ、
ぁあ……ぁああっ……
あっ、あっ、んんっ！」
「まゆちゃん、そういう顔をするんだね」
「あ、あ、んっ……あっ……っ……
はぁっ……あぁうっ……んっ……
新開さん、だめ、だめっ……
ぁあっ……はぁっ……」
ゼンッ
ゼンッ
はぁ
はぁ
「呼び捨てでいいよ。
俺の事は、悟で。
ほら。呼んでよ。俺の名前」
「さ、悟……さんっ……」
「ほら……言ってごらん。
どうしてほしいんだい、これから？」

「はぁ……はぁ……あ、あ……あっ……い、い……」
はぁ～……♡
はぁ～……♡
ドキン
……靖くん、ごめんね。
「……入れて……はぁっ……はぁっ……っ」
「……犯●よ」
心臓が跳ねた。
「……おか●て……くださいっ……」
ドキン
わたしは……かつてないほどに、びしょびしょに濡れてしまっていた。


「ぁあああッ……んんっ……
ぁっ……くうっぅうんんぁあああっ!」
……ぬるっと、奥まで一気に
大きなおち●ちんが
私の中に入り込んできた。
「すごく濡れてたから奥まで
一気に入っちゃったけど……
大丈夫?」
「ぁっ、ああっ……
大丈夫じゃ、ないですっ……
だ、だめっ……あ、あ、
あ、あ、だめ、だめっ……」
入れられたばかりなのに、私、
もうっ……イキそうになってるっ……
「――ッッッッッッ」


「あぁ……ぁ……あ……あ、あ……あっ……うそ……うそっ……あ、あぁっ……」
「……まゆちゃん、もしかして、あんまり経験ない？」
「ないっていうか……お、夫とは、週3くらいでっ……してますけどっ……」
「今までしたのって……旦那さんだけ？」
「はぁ……はぁ……はぁ……はい……はぁ……はぁ……」
その時、私のスマホにメッセージがいくつも着信しているのに気づいた。
「旦那さんかな？　確認する？」
『もうセックスしているのか？
しているのかどうかだけでいいから、返事をください』


……私はちょっとだけ迷った後、
一言だけ返してマナーモードに設定した。
「OKかな。じゃあゆっくり慣らしていこうね」
「あぁあっ、いやぁあっ……あっ、凄い、
あっ、だめっ……くっ、あはあああっ、んっあっ……ぁあっ……」
「大丈夫だよ。
まゆちゃんが俺の形に慣れるまで、ちゃんとペース合わせてあげるから」
「んぅううっ……んぁっ……！
あっ……くぅっ……んっ、あっ、あぁっ、ふぁっ！」


「ああっ、セックス、してるっ……
う、浮気、しちゃってるっ、
私っ……ああっ……」
「気持ちいい？」
「気持ちいいっ、
気持ちいいですっ……っっ！
……っっ！」
「敏感だね。本当に。
旦那さんとするときもそうなの？」
「あ、あ、ああ、あっ、ちがうっ……
こんな、なったことないっ……！
ああ、あ、あ、あ……！」
「じゃあ、旦那さんと比べてどう？」

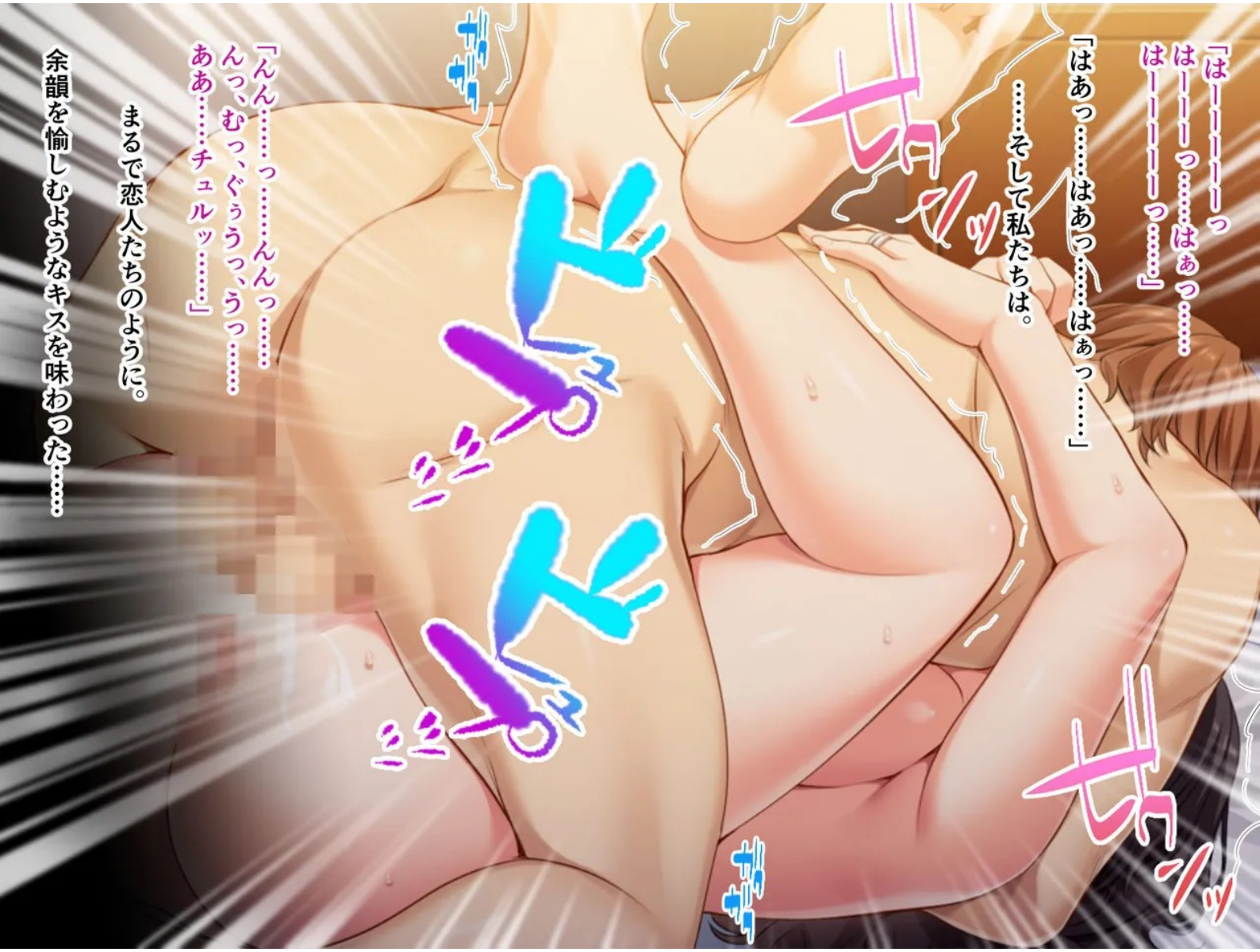

「はあっ、あぁあ、っあああぁ……
ぁあっ……あうっ……だめ、だめえええっ……！」
新開さんの動きは、
ますます大きくなっていく。
「うぅっ、ぁぁ……ぁあああっ……
ぁあっ、んっ、んあっ、あぁ、いぃ！
ぁあっ、んっ……ハァ、ぁあっ、んっ、
はぁあっ……はぁっ……んんッ……！」
ズンッ
ズンッ
ズンッ
犯●れてる。
後ろから腰を打ち付けられて……
犯●れてる、私っ……！
「ほら、教えて？
旦那さんとするのと、どっちがいいのか」


「はぁっ、ぁぁあっ、あ、
ひぅっ、だめ、言えないっ……！
そんなにえっちなこと
しないでっ……っ……！」
「ダメなの？　どうして？」
「気持ちいいからっ……
あ、あっ、あああぁっ！
ダメになっちゃいそう
だからっ……！
ぁあああっ！」
「まだ入れたばかりだよ。
真由美」
「あ、あぁっ、い、いやっ……
激しくしないでっ、そんなっ、あ、ああっ！
いや、いやっ……靖くんと、
できなくなっちゃうっ……あ、あっ！」
はぁ
はぁ


「きっと旦那さんも喜んでるよ。真由美がセックス大好きで」
はぁ～……♡
ヒクッ//
「くぅぅっ、うぅっ、はっ、はっ、んっ、だめっ、だめぇえええっ！んっ、んふぅっ、んくぅぅぅっ！　はっ、あっ！」
「だっ……めっ……！んんんんんんんんんっっっっっっっ――！」
ビクビクッ
「はっ！　はぁっ……！　はぁ！　はっ！　はあっ！」
「じゃあ、今度はこっちおいで」


「はっ、あっ……くぅっ……
はあぁあっ……ダメ、だめです、
キスは本当にっ……だめ、だめっ……！
んんんんっ……!?
んっ……っ……っっ……！」
「ダメって感じじゃないよ、真由美」
「チュムッ……はぁん……
チュルッ……んんっ……んっ、
ハァ……んっ、っ……んっ……」
「どっちがいい？
セックスしながら
感じてる顔を見られるのと、
深いキスをしながらするのと」
「じ、じゃあ……
キス……しながらがいい」
「オッケー」
ちゅっ
ちゅっ


「うぅっ、あっ……んっ
むぐっ……ぷはっ、んっ、っ……
チュルッ……ふぅんっ……」
ヂュポ
ヂュポ
ズニッ
ズンッ
「はぁああっ、あーっ、あっ、
あーーーっ……っ……イ、
イっちゃう……ぁあっ……
イっちゃうよっ……」
「イクとこ見ていい？」
「ダメ、あっ、あああっ！
お願い、キスしてっ、あ、あっ
キスっ……キスしたいっ……
許してっ……ああぁっんっ！
あくうっ！　あぁっ……！」
「あぁぁっ……！
あぁっ、イ、イクゥッ……イクッ……
だめっ……だめぇえええええつつつつ」
ズニッ
ズンッ


「はーーーーーっ
はーーーっ……はぁっ……
はーーーーーっ……」
「はあっ……はあっ……はぁっ……」
……そして私たちは。
ドンッ
ドンッ
ドンッ
「んん……っ……んんっ……
んっ、むっ、ぐぅうっ、うっ……
ああ……チュルッ……」
まるで恋人たちのように。
余韻を愉しむようなキスを味わった……


何回目のセックスなんだろう……
酔い過ぎて……ちょっとよくわからなくなってる……
「んっ、チュ、むぅううっ……ぐうっ、
うっ……ふ、つむっ……ズブチュッチュルッ……
ふむっ、んっ、んっ……チュブッ……」
ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ
また、私の口の中に
お酒が入り込んでくる。
「んっんっんんっふっ……んっ！
ふっ！　んっ！　ふっ！
ううぅっ……うふっんんっ……
んっ、うぅっ、ぷっ……！」
こんなに飲むつもりなかったのに……でも……
WISKEY


「あ、あ、あ、あ、だめ、だめっ……
それきもちいいっ……！
ああっ、気持ちいいっ……！
悟さん、あ、あっ、気持ちいいですっ、
気持ちいい、いいっ、いいっ……！」
「真由美、こっち向いて」
ビクッ
はぁ
はぁ
ビクッ
「あ、あ、あ、あ、あ、あぁっ！
だめ、だめっ……そんなに、
キスしたらだめですっ……」
「キスじゃないよ。
お酒飲ませてるだけだから」
「あ、ああっ……はひっ、ふぁぁっ！
あっあっはぁ…はぁ……
あっあっハァ、ハァ……」


……視界の隅に、時計が見えた。
日付がいつの間にか変わっていた。
あれ……今日って確か……
結婚記念日じゃなかったっけ……
「うふっ、むぅっ、んっ、んっ、ズズッ……
うぐっぅうっ……っ、んっ、んっ、んんっ、
くぅんんっ……うっっ、んんっふっ……」
やめなくちゃいけないのに。
なのに……
「真由美ってセックス好きなんだね」
はぁ
はぁ
ビクン
ビクン
ISKEY


「す、すきっ、あっ、好きですっ……
はあぁあっ……あふぅっ……
あ、あぁっ……んっ、ぁあぁんっ……」
……やめられない。
身体が熱い。
もっと激しく交わりたい。
はぁ
はぁ
「あぁっあぁぁあああっ！
うあぁっ、あっ、あぁっ！
はぅっ……いっ……ひいっ、
いっ、あぁ……あぁあ……くっ……」
あれ……。
そういえば新開さん、ゴムつけてたっけ……


「ぁっ……あふぁあっ……
悟、さんっ、あぁっ……ああっ、ご、ゴム、
ついてましたっけっ……んっ……ぁっ……
はあぁっ……んんっ……あ、ああっ……！」
「大丈夫、イキそうになったら
ちゃんと着けるから。
妊娠させるようなことはしないよ」
……なら大丈夫なのかな。
はぁ～……♡
はぁ～……♡
新開さんがそう言うなら
大丈夫なんだと思う。
「ぁあっ……いゃ……あ、あ、あ、あっ
深いのだめっ、はっ、
はぁんっ……ああっ、あぁっ！」
「……ほら。
子宮に当たってるのわかるでしょ」


「あっ、ああっ……
だめ、と、とまんない、あっ、
き、気持ちいいの止まんないっ……
あ、あっっ……あああああっ……！」
「そろそろ
イキそうになってきたけど、
どうしようか？」
「このまま生で外に出すか、
ゴム着けて中で一緒にイクか。
どっちがいい？」
はぁ
はぁ
ズンッ
ズンッ
ズプッ
ズプッ
「は、はっ、はぁーーっ……はーーーっ……」
そんなの、考えるまでもなく決まってる。



「はっ、はあっ……中で、一緒が、いいですっ……はあ、はあっ……」

「わかったよ。ちょっと待ってくれよ」

……今、もし新開さんがその気になって。

生で中に出そうとしたら、私はどうしただろう。

「入れるよ」


「んっ……あ、あ、あああ、あ、あっ……
ぁぁぁぁぁぁあああっ……！」
……気が付くと、ゴムを着けた
新開さんにうしろから犯●れていた。
「うぁっくぁっ……あぁぁっ！
んんっ……あっ、いや……ぁっ……
いっ、やっ、やぁっ……ぁあっ、
ぁあああッ……んんっ……」
ズニッ
ズニッ
ズンッ
はぁ
はぁ
ズンッ
射●するために動いてるっていう感じ。
まるで物扱い。


「凄い、あっ、激しっ、あぁぁんっ！
あぁっ……あぁぁぁぁ……
あっあひぃぃっ！」
……でも、それが。
その乱暴な扱いが、すごく興奮する。
靖くんは絶対してくれない
セックスだから……！
「はあっ、あぁあ、っあぁぁ……
ぁあっ……ぁあぁっ……くっ、んっ！
っぁあぁっ……ぁあぁっ……
はぁあっ……あ……あぁっ……んぁっ！」


「イクよ、真由美……！」
「来るっ……ぁああっ……きちゃうっ……凄いのっ……き、きちゃうっ……！あぁっ、んっ、んんっ、んはぁっ！」
「きてっ……来てぇっ……ふぁっ、ふぁぁっ……あっ、んんっ！くぅっ、あああああああっ……！」
ビュッ
ビュルルッ
ビュッ
ビュッ
はぁ～…♡
はぁ～…♡
「っっっ――!!」
「きてえぇえぇえぇえ――っ……！――っっ……」


「――っ！　んはぁっ！
はぁっ！　はぁっ！　はぁ……」
「はぁ……はぁ……っ
っ……はぁ……はぁ……」
ビクッ
ビクッ
「じゃ、今夜はお疲れ様」
「念のため明日起こしに来るよ。じゃ、お休み」
「……」
靖くんからは、沢山のメールが来ていた。
なんだかそのメールを見て、すごく申し訳ない気持ちになってしまった。
「……」
日付を跨いで、新開さんとセックスを続けてしまったことは、
隠しておいた方がいいよね……そう思った。


出張から帰ってきた真由美と二人で寝室に入ったのは夜の7時半。
小学生……いや、幼稚園児ですら、こんな時間に床につく子はいないだろう。
でも、待ちきれなかったのだ。
「んふっ……あっ……かたっ……靖くん、ずっと我慢してたんだね……♪」
「いいんだよ？　イキたくなったら、いつでもイっていいからね？　ただ……」
「……新開さんは、こんなに早くイったりしなかったけどね？」
「まだ、大丈夫っ……」
「ふふっ……そうだね。ご褒美あげるね……チュッ……んううっ……っ」
ちゅっ


「晩御飯でお酒飲んで……
そのあとはふらふらになったから
新開さんに抱かれて、
そのまま……お持ち帰り」
「……抱き合って、
いろんなところ触られた」
「感じたのか……？」
「うん。感じたよ。
おっぱいのさわりかたも、
あそこの愛撫も……
靖くんとは違ってた。
浮気してるんだなーって思った」
「で……イったのか、結局……」
「……そうだね。イかされたよ？
新開さんのおち●ちん、入れられて……
すぐイっちゃった……」


「そんなに……入れられてイクくらい、我慢させられていたのか」
「それもあるけど……それだけじゃないんだよ？……新開さんのおち●ちんね。すごく大きかったの」
「あまりにも大きかったから、ゆっくり動いてってお願いしたの。やばいなーこれって思って。でもね……ゆっくりでも全然我慢できなくて……」
「そんなに……大きかったのか？」
「うん……大きすぎるって程ではないけど……他の男の人としたの、初めてだったし。靖くんのとはカタチも全然違ったから……」
「……だから、まずは新開さんのおち●ちんが馴染むようにって……ゆっくり、ゆっくり、時間をかけてえっちしたの」


「その後は……」
「いっぱいしたよ。
後ろからすごく沢山突かれた。
奥まで何度も突かれてイかされて……
子宮を突かれるのが弱いんだねって
言われたんだ……」
「……靖くんは知ってるもんね、
私が奥までおち●ちん入れられたら、
すぐに気持ちよくなっちゃうの」
はぁ
はぁ
「新開さんにもバレバレだった。
それからはもう激しくて……
ずっと気持ちいい、気持ちいいって
言ってた気がする」
「あ、あっ……だめだっ……
あ、あっ……」


「……本当に興奮しているんだね。
私が浮気してきたこと」
「……その後はね、
正常位でエッチしたの」
「新開さんの顔すごく近くて……
私の感じてる顔見るんだって言って、
じーっと見つめられてた……」
はぁ
はぁ
ビクン
「……恥ずかしくて、
見ないでくださいって言っても
やめてくれなかった」
「だからね……どうしたと思う……？」


「……キス、したの」
ちゅっ
「イってるところ、見られたくなくて。イキそうになるたびに、新開さんとキスしたの」
「……イク時に……真由美の方から、キスをしたのか」
クスッ
クスッ
ぢゅぷ
ぢゅぷ
ビクン
ビクン
「……うん」
「それで……終わったのか」
「……うん、1回目はね」
「え……」


「もう、理性もなにも無いよね。
私……新開さんに抱き着いて……
何度も言った。
気持ちいいです、
すごくいいです、って……」
「……今までしたセックスの中で……
どれくらいよかったんだ」
「……いちばん、だと思うよ？」
はぁ
はぁ
ズンッ
ズンッ
ズプッ
ズプッ
「」
「あっ……またびくってした」
「……ご、ごめん。
興奮しすぎて、本気でやばい」


「そっかそっか……
でも、私もすごくよかった」
「他の人のえっちって、
やっぱり違うんだね」
「あんなに気持ちいい
えっちがあるなら……
私、また浮気してみたいな……」
プチ
クス
クス
プチ
ズチュ
ズチュ
ヤンッ
ヤンッ
「靖くんが悦ぶように、
えっちなことたくさんしてくるから。
だから……ね？　お願い」
「……また浮気してきても、怒らないでね……」
『あっ……!!』


「……すっきりした？」
「え……あ、ああ」
「あのね……勘違いしないでね。
……本気で言ってたんじゃないからね」
「……靖くんが悦ぶかなと思って、言っただけだからね」
「そ、そうだよな……はは、ははは……」
「不思議だよね。
浮気をしてきたはずなのに、する前よりも、靖くんが愛しい」
「……俺もだよ」
「よかった……」


……やっぱり今までとは、やはりちょっと変わった気がする。
したことは、真由美の浮気だというのに、
なのに怒る気には全くならずむしろ愛しい。
真由美からも、普段以上の想いを感じる。
真由美を貸し出して本当に良かったと、俺は思うのだった。
「新開さんとのセックスで散々乱れてきたんだろ」
「い、いや……言わないで……あ、あっ……」
「あ、あ！　う、うそっ……！　おっきいっ……！
あ、あ、ぁあっ！　んっ……ハァ、ぁあっ！
あぁっ……あっ……っ……あっぁあああっ！」
はぁ
はぁ
ズンッ
チブッ
チブッ


「っ……ほら、こういうのがいいんだろ。
散々こうやって、激しくされてきたんだろ」
ずんっ
「あっ、あっ、あぁぁっ！
あぁっ……あぁ……あっ、あっ、あっ！
変に……なるっ……あ、ああっ……！」
「はぁっ……ああぁっ！
あっう、だめっ……もうだめっ……
んんぁあああっ！」
「あぁぁぁぁあぁぁっ……
んんんんっ――っ……
だ……めえっ……ぇえっ――！」
ずんっ
ずんっ
はぁ～……♡
ビクンッ
はぁ～……♡
「はぁっ……はぁ……はぁ……
ぁあ……はぁ……はぁ……」


新婚気分な日々は、以前にも増して続いた。
家の中では終始べたべたしていたし、外に出ても、手を繋いで行くことが増えた。
「……いつまでも、こういう気持ち大事にしたいよね」
「そうだな」
そしてしばらくの月日が過ぎた。
「あのね、靖くん。来週の月曜日なんだけど……また出張に行くことになったんだ」
「そうなのか……ひとり？」
「ううん、新開さんと一緒。
……靖くんが嫌なら、無理言って断ることもできるけど……」


「心配は特にしていないけど……新開さんとはあれからどう？大丈夫なの？」
「んー……最近は結構自然な感じかなぁ。……でも私はちょっと、昔を思い出したりしたかな」
「靖くんと初めてえっちした後さ、恥ずかしいなーって思ってたんだよね」
「新開さんも頭の中ではどう思ってるのかなーって考えると、はぁぁぁ……てなっちゃうんだよねぇ」
「真由美は新開さんとの行為を思い返していたりするのか？」
「……そ、それは内緒！」
結局真由美は何を思い返しているのか教えてはくれなかった。
でも……だいたい考えていることはわかる。なぜなら……。


「あ、あ、あはぁっ……うん、そうだよ……新開さんのえっち、すっごく気持ちよかったよ……このまま朝までしちゃってもいいって思うくらい……すごかった……」
はぁ
はぁ
……こうして、セックスをする度に聞いているからだ。
「ねぇ、またしてもいい……？新開さんと浮気してきてもいい……？ねぇ、いいでしょ？だって靖くんのおち●ちんは、こんなに悦んでるんだもん」
「えっ……そ、そんな……ああっ……だめだ、それ気持ちよすぎるっ……」
「あぁぁ……すごい……ねぇ、もっと言って。気持ちいいってもっと言って……靖くんのえっちな声、もっと聴かせて……」


「ああ、気持ちいいよ、真由美……すごくいい」
「あ、あ、これ、これっ……！
わたしも、いきそうっ……っ……！
あ、ああっ……！
ぁあっ、はぁあっ、ぁあぁあっ！」
「真由美……俺もっ……！」
「あっあっ……イクうぅぅぅぅぅ！
イクゥうぅッッッッ……」
「……真由美。さっき言ったのって、本当に思ってる？」
「……いいの？　またイかされちゃうよ、私？」
「いい、いいよ……まゆみが……そうしたいなら……」
……そうして俺はまた新開さんにお願いする機会を作ってもらった。


「高坂です。お待たせしました」
「ああ、ちょっと待って。今開ける」
「……じゃ、始めようか」
「はい。ちょっと失礼しますね」
新開さんの前で膝立ちになる。
そして……ズボンのチャックをゆっくり降ろした。
「舐めますね」
「んっ、んっ……ぅんんっ、
んん、んっ、ふっんんっ……っ……」
ヤメ…
チュッ


……この前は乱れすぎてしまった。
だから、今日はその予防。
新開さんのおち●ちんをお口で
気持ちよくしてあげることで、
セックスの回数を減らそうと思った。
とは言っても、お口のテクニックには
全然自信なかったのだけど。
ビクン
じゅぽ
じゅぽ
ビクン
そもそも私、靖くんにしか
こんな事した事ない。
「んぐぅぅっ……ぅぅっ……んっんっ……
ん、んっ、くっ、んんっ、うっ、んんぅんんっ……」
「今日まゆちゃんが、
俺にフ●ラすること旦那さんは知ってるの？」


「ちゃんと言ってますよ。
んっ……じゅるっ……むぐっうぅう……
んっ、ふっ、んっ、ふっ、うふっんんっ……」
「俺だったら、愛してる妻が他の男に
フ●ラしているなんて耐えられないけどね」
それ、普通の感覚だと思う。
でも、浮気じゃない。
はぁ
はぁ
ちゅっ
ちゅっ
靖くんがしてきてほしいって
望んだことだから。
「んん、うぅっ……チュッ、ハァ、
んんっ、ハァ……ハァ……はぁ……
新開さん、すっごい固くなってますよ」
「……こんなシチュエーションに、
興奮するなっていう方がおかしいでしょ」


「いつも、そんな感じでしてるんだ」
「ズブチュッ……チュルッ……
ふぅんっ、んむぅ、っう、ううんっ、
うっっ、くっ……うぅっ……んむっ……
ふっ……むんんっんっ……」
「んんっ……むっ……っうっ……
っ……んっんっうっんんっ……っ
……んはぁ……はぁ、はぁ……
ちょっと休憩……はぁ……」
はぁ
はぁ
ちゅぱ、ちゅぱ、
ちゅぱ、ちゅぱ
「ごめんな。でかくて」
「えっ、自慢ですか？
確かにおっきいですけど」
「いいだろ。こんな自慢、
まゆちゃんくらいにしか出来ないんだから」


「別に、そうなりたくてなったわけじゃないんですけどね」
……これは、半分嘘だった。
この貸出プレイには、私の欲望も半分入っているのだから。
はぁ～…♡
はぁ～…♡
「んっ……っ……んんっ……
んぶ……っ……むぶぅっ……っんっ……」
……でも、それは新開さんが知る必要のないこと。
実は靖くんにお願いされる前から、新開さんに無理やり犯●れる妄想をしてました、なんて絶対言えない。


「ペロっ、ふぅ、はぁっ……ペロッ、クチュ！
むっ……ぷっ、ふっ……くっ、
んんっ、んっ……ぅんんっ、んっんっ」
「……やば。
そろそろイキそうになってきた」
「んっ……ぅんんっ、んっ、
っぁあっんんっ……っ……
むっうぅうっ……んんぅっ、んっ、
うぅっ、ぷっ……むっウッウウウ……」
はぁ
プルルン
ぷるるっ
ぷるるっ
はぁ
ぷるるっ
ぷるるっ
「ま、まってっ……マジでもう
我慢できないからっ……！」
「あ、出るっ……！」


「んんっ……んんんんんんっっ――ッッッッ」
「んぐっ……こくっ……ちゅ、ちゅるっ……
ちゅるるっ……んぐっ……んぐっ……んぐっ……」
「はーーっ……はぁっ……はぁ……っ……」
ヒュッ
ヒュッ
ヒュッ
ヒュッ
ヒュッ
「ちょっとまゆちゃん、飲んだ？」
「……新開さん。
精●ちょっとニコチン〜さいですよ。
うがいしてきます」
「あはは……ごめんごめん」


その後、小休止したあとまた
新開さんのおち●ちんを
大きくしてあげた私は……
「あぁっ、くぅっ……ぁああっ……あ、はんっ！
あんっ、はぁっ……は、はいってっ……
きたあっ……んんっ……あぁっ……！」
この前のように、後ろから犯●れていた。
「ぁ……あ、あ、ああっ……ああっ……
お、っきっ……すぎですっ……
新開さんっ、あああああっ……！」
「新開さん、じゃないでしょ」
「はあっ、悟さん、ま、前より絶対大きいっ……
す、すごい、深いところまで来てるっ……」


「子宮までちゃんと届いてる？」
……届いていた。
こんなに大きいおち●ちんなんだから、
届かないはずがなかった。
「まゆちゃんがエロいせいで、
こんなにおおきくなったんだけど。
ぶっちゃけ、仕事中も結構我慢してるんだよね」
「そ、そんなの私のせいにしないでっ……
ふぁっ！　んんっ……あぁぁっ！
ひっ、くぅっ!?　あ、あ、あ、あ！」
ビクン
はぁ
はぁ
ビクン
ブブッ
ブブッ


「……今日が来るの、ずっと楽しみにしてたよ」
「あっ、あ……う、うんっ……あっく、ああっ、はぁああっ！うそ、そういう事、言わないでっ……」
「でも、気持ちいいんだろ？旦那のエッチより」
「ぁああっ、お、奥っ……奥、ああぁああっ！そ、そんなに押しつけないでっ……ひぅっ、あぁん……うあぁっ……！あんっ……！」
はぁ
はぁ
ブヒッ
ブヒッ
「気持ちいい、きもぢいいっ……！ ああぁっ！だめっ……こんなのっ……またっ、はひっ、あ……あぁ……っ……あっ、あんっ！」


「なんだよ。もうイクの？
奥が弱いんだな、まゆちゃんは」
「そこっ……されたら、
誰だって気持ちよくなるに
決まってるじゃないですかっ……！」
「そういう逆切れ、大好物」
急に新開さんの動きがゆっくりになった。
「ぁああっ……ああっ、だめ……そんなっ……
あ、あっ……うごいてっ……悟さんっ……」


「は、激しく動いてもいいですからっ……悟さんが、好きにっ……動いてっ……」
「……じゃあ、子宮たくさんいじめてもいい？」
「い、いいっ……！いいですっ……悟さんが、好きにしていいですからっ……」
はぁ
はぁ
ズンッ
ズンッ
「子宮を虐められるの、好きなんだ？」
「す、好きですっ、ごめんなさいっ……！だ、だってっ……す、すごいっ……気持いいからっ……！あはぁっ、あぁっ、あぁあっ！」
ズブッ
ズブッ


「あぁっ、あっもうだめっ……！
イッちゃう、イっちゃうっ……イっちゃうっ……！
あっ、あっ……！　イっちゃううっ……！」
「……中で出すよ」
どきっとした。
ゴムをつけているのはわかっているけど、
まるで中●しするみたいな言い方だったから。
「あっ、あっ、あぁぁぁっ！
あぁっ……あぁ……あっ、あっ、あっ！
変に……なるっ……あ、ああっ……嬉しいっ……！」


「ああっあぁぁあああっ！
うああっ、あっ、ああっ！
はぅっ……いっ……ひいっ、
いっ、あぁ……あぁあ……くっ……」
はぁ
はぁ
「はぁっ……あぁぁっ！
あっう、だめっ……もうだめっ……
んんぁあああっ！」
「あぁぁぁぁあぁぁっ……んんんっ——っ……
だ……めえっ……ええっ——！」
ビュルッ
ビュルッ
「はぁっ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」


「ち、ちょっとっ……新開さんっ、おっきくしすぎっ……ですよっ……」
「ほら、また呼び方戻ってるよ」
「あんっ、あっ、悟さんっ、どうしてっ……そこっ、だめっ、ひぃっ、あっ、あっ、だ、だめ……」
はぁ
はぁ
「旦那さん、こんなまゆちゃんの姿見たら腰抜かすだろうなぁ」
「靖くんはっ、た、たぶんっ、喜ぶと、思いますっ……あぁぁ……ぁあっ……ぁあっ、ぁあっ……」


「なら、もっと気持ちよくならないとね」
「ぁあっ、はぁっ……悟さんは、動かないでっ……はあっ、あぁあ、っああぁ……ぁあっ……あ、あ、はあぁあっ……ぁあっ……！」
私が責められるセックスも。
私が責めるセックスも。
靖くんはものすごく興奮して、喜んでくれる。
「あ、あ、あぁっ……あっ……っ……だめっ、あ、あ、あ、あ、くるっ……またくるぅっ……！」
こうして他の男の人の上で腰を振って。
自分でイっちゃうのも……喜んでくれる。


「あぁあぁぁぁぁぁぁぁぁっ……
あぁぁあぁぁぁぁぁぁぁ――」
……だから、気持ちよくなってもいい。
「はぁぁあっ……ぁあっ……
はぁーっ！　はっ、はぁっ……！」
それが靖くんの望んでいる事
なんだし……
「旦那さんと俺、
どっちのセックスが好き？」
はぁ
はぁ
「そんな意地悪
言わないでください……っ
……あっ、あっ……！
前に、ちゃんと答えたじゃ
ないですかっ……ぁああっ、
ハァアッ、あっあっはっ、あっ！」

「答えてくれないなら、抜いちゃうよ」
「あ、あ、だ、だめっ……どうしてまた意地悪な事するんですかっ…
…抜かないでくださいっ……」
「じゃ、どっちがいいかちゃんと答えて？」
「ああ、ああ、あっ……悟さんの方がっ、気持ちいいですっ……んんっ……あ、あ、あ、あ、あぁっ……！」
はぁ～……♡
はぁ～……♡
「いいや、今聞いたのは気持ちいいかじゃなくて、『どっちのセックスが好きか？』ってことだよ。ねえ、どうなの？」


「そんなのしらないっ……！
ぁああっ、ぅんっ……あっあっあっ！
もっと、もっとしてっ……悟さん、それもっとっ……！」
「えっちが大好きなんだな、まゆちゃんは」
「はぁっ、はぁっ、悪いですかっ、好きですよっ……
でも、そういう意地悪な事を言う人は嫌いです……っ
……ぁあっ、はぁあっ、ぁあぁあっ……」
「じゃあ、好きになってもらえるように頑張るよ」
「だめっ、だめっ、あぁ……あぁあ……
あ……あぁっ……あぁっん、あ、あ、あ、
あ、んぅっ、ひぁん、んふっ、あん！」

「っ……そろそろ、俺も限界近いわっ……」
「ああぁん……ほんとですかっ……？悟さん、きてっ……はっ、あっ、あぁぁっ……！」
「オッケー、一緒にイこう」
「あああああっはぁああっ、あっあっあ、あ、あ、あ、っ……んんんんっ……はぁっ……はぁっ……」
プル
プル
プル
プル
ぬへへ
ぬへへ
ゼンッ
ゼンッ
「あっ……くっ……だめだっ……っ……まゆちゃんっ……」

「うんっ……いいよ、きてっ……きてっ
ぁあああああっ……来てっ……はぁっ……
んっ、あぁあっ……あぁあぁっ……！」
「あぁあっ……くっ、あっあっあっぁぁ……
ぁあああっ……ああっ……
い、くっ……いくっ……悟さんっ……
わ、私もっ……いくっ……あああっ……！」
「あぁぁあぁあああぁぁあぁぁぁ――っっ……！」
ヴヘヘ
ヴヘヘ
「はーーーっ……
はぁっ……はーーっ……
はぁっ……はーーっ……」


「……もう待ちきれないんだね。
どうしようっかなぁ。話すの、明日にしようか」
「お、おい……やめてくれよ。
もう待ちきれないんだよ……変に焦らさないでくれ」
「ふふ……うそうそ。冗談だよ？
私もね……靖くんに話したいなーってずっと思ってたから」
「そ、それは……どうして？」
「それはねー……靖くんに話したくなるくらい……
すてきなセックスをしてきたからなんだよ？」
はぁ～……♡
はぁ～……♡
ビクッ
ビクッ


「な、舐めたんだよな、確か……」
「うん、そう。舐めたよ。新開さんのおち●ちん。ちゃんとご奉仕してきたんだよ」
「知ってる靖くん？フ●ラってね……好きな人のじゃないと、上手に出来ないんだよ？」
ぢゅぱ、ぢゅぱ
「え……す、好きって……」
「うん、そう。好きな人のおち●ちんだから、上手にしゃぶれるの」
「じゃあ……新開さんのは……上手にしゃぶれたのか……？」


「……もちろんだよ。
新開さんのおち●ちん、
ちゃんとイかせてあげたよ。
精●も飲んじゃった」
「う、うそだろ……俺とするときは、
飲んだりしないじゃないか」
ドロォ
ブニュッ
ブニュッ
「ふふっ……そうだったね。
靖くんの精●は、
いつも飲まないもんね、私」
クスッ
クスッ
ビクン
「あ、ああっ……！」
やばい。
イキそうになってしまった。
「あっ、ごめんごめん。
もちろん靖くん愛してる。
でもね……カラダは新開さんの方が
好きになっちゃったみたい」


「だって新開さんセックスは
本当に素敵だから。
何も考えられなくなるくらい
感じちゃうから」
「そんな……何もって、
まさか俺の事も……？」
「そうだよ。靖くんの事も
考えられなくなっちゃうの」
はぁ
はぁ
ヒクン
ヒクン
ズプッ
ズプッ
「おち●ちん入れられてる時は
新開さんのことだけ。
どうやったらもっと
気持ちよくなれるのかな、とか、
一緒にイキたいな、とか……
そういうことばっかり考えてる」
「でもしょうがないよね。
だって……靖くんのおち●ちんよりも、
新開さんのおち●ちんの方が
気持ちいいんだもん」
「……すぐにイっちゃうもんね、靖くんは」


「あ、ああっ……ダメだっ……でるっ……！」
「あーあ……イっちゃった。
もうちょっと我慢してほしかったのになー……」
「そ、そうだ……
ゴム、渡すの忘れてたけど……
大丈夫だったのか？」
「……いれちゃったよ。
生のおち●ちん」
「……!?」
「っていうのはウソ。
ちゃんと新開さんが持ってきてくれたから、
それを使ったよ」


「それとも……
生でセックスした方が
うれしかった？」
「いや、まさか……そこまでは」
はぁ～……♡
はぁ～……♡
「ざんねん。靖くんがいいよって
言ってくれたら、私も新開さんも
すごく嬉しかったのに」
「妊娠したら
どうするんだっ……」
「えー？　大丈夫大丈夫。
ちゃんとイクときはおっぱいとか、
おくちに出してもらうから……」


「ぁぁぁ……本当によかったなぁ、新開さんのセックス……」
「だめだっ……もうっ……イクっ……っ……！」
はぁ～……♡
ちゅっ
ヤクソッ
ヤクソッ
「ぁっ……いいよ、イってもいいよ」
「んっ……んんんんっ……ぁぁ……あついっ……靖くん……」
「満足できた？」
「……まだ、もっと……もっと聞きたい」
そうして俺は、真由美の浮気告白を耳元で囁かれながら……
何度も何度も、手でイかされたのだった……


「あのね……また出張が決まったんだ」
「最近多いな、出張」
「うん……海外出店することになって、それでちょっと忙しくなってきたの。フランスに出店するんだ、うちの会社」
「それで、本社での会議が増えてるの」
「なるほどな……今回も」
「……あのさ。お願いがあるんだけど。今度はちょっとステップアップしてほしいな」
「ステップアップって……？」
「……撮ってきて欲しい！」


「……そろそろ、かな。頼むよ、真由美……」
俺の願望がようやく叶う。
どんな顔をして抱かれているのか。
どんな声をあげて抱かれているのか。
どんな風に感じ、どんなふうに求め、どんな風にイクのか。
俺以外の男とセックスをして、楽しんでいる真由美の姿。
その全てを……俺は知りたい。
「はあ……はあっ……」
今真由美がしているという現実よりも。
ついに見ることが出来るその映像が……今の俺の興奮の全てだった。


数日後。
「ただいまー……あれ？」
真由美のメモがCDBメモリと共に置いてある。
『見たらちゃんと消すように！
あと靖くんのしこしこ動画もちゃんと撮ること！
あと、今日は自分の部屋で一人で寝るので
探さないでください……真由美』
この中に、真由美の浮気セックスが収められている……
空腹感など、どこかへ飛んで行ってしまった。
俺は急ぎ普段着に着替えると、
さっそくそのメモリーをモニターに差し込んだ。


「ひぅっ、はっ、はっ、んっ、あぁぁぁっ！　はぁっ、はぁっ……っ……」
ビデオは挿入されている所から撮影されていた。
こんな顔して、セックスしていたのか、真由美……
「感じてる高坂くんの顔、丸見えだよ」
「あ、ああっ……だ、だめっ……見ないでっ……はぁっ、ぁああっ……」
あんな顔……見た事ない……
はぁ
はぁ
グッ
グッ


「あ、あ、あ、あ、や、だめっ……
あ、あっ……くうっ……はぁんっ……
くぅぅっ、はんっ！　はぁっ……んんっ……！」
「声、我慢してるんだ？」
「はぁっ、はぁっ、あっ、うっ……
べ、別に、そういうわけじゃっ……うっっ、
ひっ、あぅんっ、ああっ……！」
「そうだよね。撮影しているもんね。
普段の高坂君の姿は、さすがに見せられないか」
「はぁっ、ぁああッ……んんっ……！
そんなこと、言わないでくださいっ……！
あんっ、ふぁっ、あぁっ、だめっ……だめぇぇぇっ……」
はぁ
はぁ

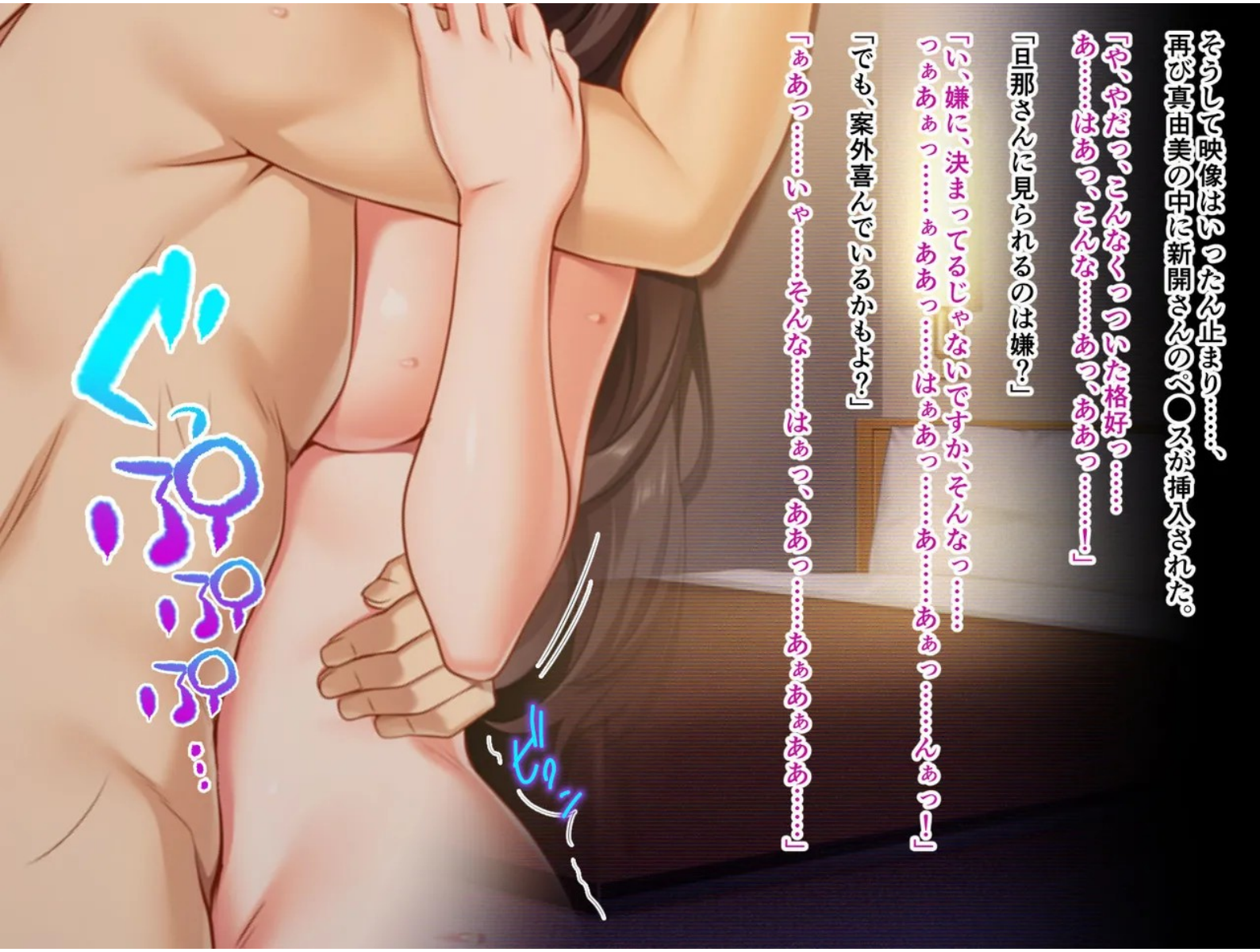

「ぁっ、ああっ……
あっあぁっ……あっ……！
だめ、だめっ……新開さん、
まだゆっくりっ……！
んぁあっ……あっあっ
あっあっあっあっ……！」
「ほら、旦那さんに
お願いされてるんだろう？
撮ってくれって」
ヴィーン
ヴィーン
「もっと顔見せてあげたら？
夫以外の男とセックスを楽しむ表情を」
「ふぁっ！　やだっ、あっあっ
あっあっあっぁあっ……！
んんっ……んはぁあっ……！」
「いつもは喜んで
腰を振っているのに」
「はぁ……っ……あぁっ……！
い、いやっ、変な事、
言わないでっ、ください！
んはぁっ、ふぁっ、ぁあぁ……
はぁっ、ああっ、あぁ……！」


「いやいや言いながらも、
やめられないんだな」
「だってっ……だってぇっ……！
あっ、あっ、あっ！　あ、ああっ……
うんんっ……ふっ…ああぁあっ！
ぁああっ、いやぁっ……！」
ズンッ
ズンッ
はぁ
はぁ
「こ、こんなじゃないのっ……
靖くん、本当だからっ……
あ、あっ……だからっ……
勘違いしないでっ……
あ、あああああっ……！」
言い訳しながらも、
真由美は新開さんの
セックスに酔いしれていた。
俺への言い訳を
口にしながらも、
淫らに喘ぎ、
だらしない顔をして、
新開さんの
テクニックで悦んでいた。


「じゃ、イかせちゃうよ？」
「あっ、あ、だめぇぇぇぇっ、新開さん、それだめ、だめえっ！　だめなのっ！　んっ、あ、あ、あぁ……あぁあ……！」
プシュッ
「だめっ……んんんんんんんんっっっ……――っっ!!」
ビクンッ
ビクンッ
「はーーっ……はぁっ……はぁっ……はぁっ……はぁっ……！」
あんないやらしいイキ方するなんて、知らなかったよ。
はぁ～……♡
はぁ～……♡
プルプル
プルプル
「あっ、あっ……あふぁあっ……だめぇぇぇぇっ、お願いっ、もう許してえっ……」


「もうちょっとでイキそうだから」
「う、うんっ……わかりましたっ……
でも、早くイってくださいねっ……
あっ……あ、あ、あ、あ、あっ……
うっ……あぁぁっ！
あっ……あ、あぁっ……！」
……新開さんの
絶頂が近いと知ると、
真由美は後ろに手を伸ばし、
新開さんの手を求めた。
「きてっ……きてっ……
悟さんっ……！
あぁっ、んっ、んんっ、
あぁっ、あぁっ、あああっ！
きてっ……！」
「ひぃっ、あぁっ、
あぁうっ、くっ、んっ！
ううぅんっ……！
あ、あ、あ、あんっ！
はぁっ、ぁぁあっ！」


「ぁあああぁあっんんっ……
あぁぁぁぁっ……きてっ……きてぇっ……！
あぁあっ……あぁぁぁぁぁぁぁぁっ――！」
ドプッ
ドプッ
ヒュッ
ヒュッ
ビクンッ
ビクンッ
「あ……ぁ……ぁぁ……あ……っ……
はっ……はぁっ……はぁ……はぁっ……」
「う……ごめんね……靖くん……
ちょっと……はぁ……はぁ……
気持ちよくなりすぎたみたい……
はぁ……はぁ……」
「いつもは、あんなじゃ
ないんだけど……はぁ……」
「そうだよね。
高坂君、いつもはもっとすごいもんね」


そうして映像はいったん止まり……、
再び真由美の中に新開さんのペ○スが挿入された。
「や、やだっ、こんなくっついた格好っ……
あ……はあっ、こんな……あっ、ああっ……！」
「旦那さんに見られるのは嫌？」
「い、嫌に、決まってるじゃないですか、そんなっ……
っぁあぁっ……ぁああっ……はぁあっ……あ……あぁっ……んぁっ！」
「でも、案外喜んでいるかもよ？」
「ぁあっ……いゃ……そんな……はぁっ、ああっ……あぁあぁああ……」
ぐちゅぐちゅ…



「高坂君が感じれば感じるほど、旦那さんは嬉しいんだろう？」

「はぁっ、やだっ、あぁっ！あっあぁっ！ああぁぁんっ……そんなに、深く入れないでっ……ダメッ！ああ……はぁ……！」

「……ほら、ちゃんと教えてあげないとわからないよ」

「あ、あ、ふぁ……！ご、ごめんっ……い、今っ、すごく、深く……入れられてるのっ……はぁっ、はぁっ、おかしくなりそっ……あぁっ！あ、ああっ……ぁああっ……はぁあっ！」

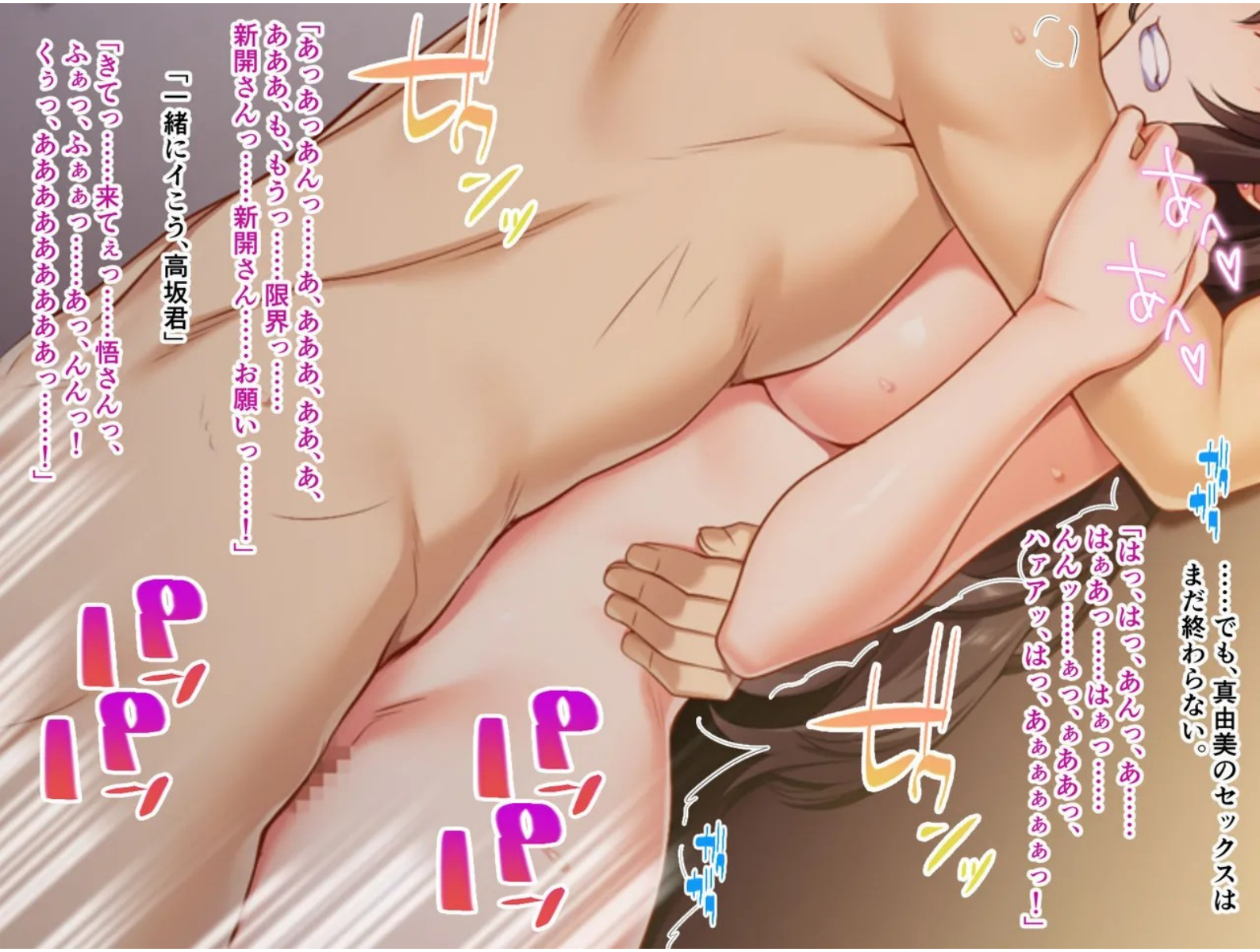
真由美がカメラ目線で、新開さんとのセックスを報告し始めた。

でも……すぐに感じ始めて。


「おかしくなるっっ！
だめっ……もうだめっ……！
イッちゃうッ……だめっ……
私っ……ああっ、ああっ……！」
「い、イク、いくうぅっ……！
イッちゃう！　んんっ……
んんんんんんんんっっっ！」
「ほら、ちゃんと見せて。
イったあとのトロンとした顔」
「……こんな顔するの？　普段は」
「はぁーーーーはーーーーっ……
しない……しないですっ……
はーーーっ……はぁ……」


新開さんの前では、
いつもそんな顔をしているのか。
俺と言う存在がありながら、
職場の上司でしかない新開さんに
発情しきった顔を見せているのか。
妄想の中の真由美以上に……
浮気中の真由美は淫らだった。
「ぁあっ……ぁああっ……！
ず、ずるいよっ……
新開さんっ……
ぁあっ……ぁああっ……
あ……あぁ……っ！」
「ああぁっ……あぁっ……さっきからっ、
私の弱いところばっかりっ……！
ぁああっ……ふぁっ……んぁっ、こんなのぉっ、
き、気持ち良くなっちゃうにっ……
きまってるじゃないですかっ」
はぁ
はぁ
ヌンッ
ヌンッ
ブヒュッ
ブヒュッ


「いいの、ここ？」
「ああっ……あぁっ……はいっ……
あぁあっ……ふぁっ……
いいっ、いいですっ……
はぁっ、はぁっ、あ、いっ、あっ……
あぁあっ、いっ、いいぃっ……」
「正直だから、ご褒美ね。
高坂君が一番好きな動きで
イかせてあげる」
「あぁっ、イ、イクゥッ……
ぁあああああっ、イッちゃうっ――！」
真由美、真由美っ……！
キシ、キシ、
ヌンッ
ヌンッ


……でも、真由美のセックスはまだ終わらない。
「はっ、はっ、あんっ、あ……
はぁあっ……はぁっ……
んんッ……ぁっ、ぁあああっ、
ハァアッ、はっ、あぁぁぁぁぁっ！」
「あっあっあんっ……あ、あああ、ああ、あ、
あああ、も、もうっ……限界っ……
新開さんっ……新開さん……お願いっ……！」
「一緒にイこう、高坂君」
「きてっ……来てぇっ……悟さんっ、
ふぁっ、ふぁぁっ……あっ、んんっ！
くぅっ、あああああああっ……！」


「きてえぇえぇえぇえぇえ――っ……！
――っっ……」
……とてつもない量の精●が迸った。
そしてそれは、真由美の●内でも
同じだったらしく。
ビュルルルッ
ビュルルルッ
「ぁっ、ぁぁぁっ……悟っ……さんっ……
で、出てる……ぁぁっ……
すごい……どくどくしてるっ……」
ゴム越しに……大量の精●が、
真由美の●内で迸っていた。
「はぁ……はぁ……っっ……
はぁ……はぁ……」


映像はここで終わった。
でも……俺の興奮は収まらなかった。
「……こんな……こんなすごいセックスをしてきたのか」
こんなセックスを経験したら……俺とのセックスなんて遊びみたいなものじゃないか。
激しく妬ましい。
なのに……再びシークバーを動かして、新開さんに突かれまくっている真由美を映し出し……
「真由美っ……」
収まらぬ興奮に突き動かされ、狂ったように自慰に耽るのだった……
―続く。



©アトリエさくら